

La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 第291号 2019年3月1日発行

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro

461-0004 名古屋市東区葵一丁目26-10ユニブル新栄301号

公式サイト <http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/>

Facebookページ <https://www.facebook.com/nagoja.esperanto>

郵便振替口座 00840-8-40765 「名古屋エスペラントセンター」

ザメンホフ祭集合写真



目次

ザメンホフ祭報告（山口眞一）	2
ワールド・コラボ・フェスタ2018への出展（前田可一）	5
センターの蔵書から（1）（猪飼吉計）	6
戦前の絵葉書に「君が代」の訳詞（山田義）	7
スペインとポルトガルにて（山本由紀子）	9
新会員自己紹介（伊藤順子）	13
活動日誌・今後の地区の予定	15
編集後記	16

ザメンホフ祭報告

Raporto pri la Zamenhofa Festo

山口 眞一

2018年12月1日（土）、名古屋エスペラントセンター（NEC）主催のザメンホフ祭が開催されました。参加者は第一部、第二部ともに23人（+取材記者1人[後述]）。特筆すべきは5人もの初参加があったこと、また久しぶりに参加、という方も2、3人いらっしゃいました。

会は下記のプログラムにそって進行了しました。司会は堀田裕彦さん。

- 14:00 主催者挨拶
- 14:10 参加者自己紹介
- 14:30 本の紹介
- 15:00 歌の紹介
- 15:20 休憩
- 15:35 ゲーム
- 16:05 紙芝居「MEIKO」
- 16:50 お知らせなど
- 17:00 記念写真
- 17:15 米川五郎さんミニトーク
- 17:30 第二部（懇親会）

「本の紹介」では、伊藤順子さんが自著『しっぽがわらう Vostoj ridas!!』を、山口が自訳書“Fabeloj el la Budhisma Literaturo”を、山田義さんが自らが編集した歌集シリーズを、鈴木善彦さんが『エスペラントー日本語を話すあなたに』および自著『住まいの健康生活術』をそれぞれ紹介しました。

「歌の紹介」は、「あの有名な曲をオリジナルとエスペラントカバーの両方で聴く」という趣向で、youtubeの動画を利用して2曲を視聴しました。一つはシャensonで、エディット・ピアフの名曲“la vie en rose (la vivo rozas)”で、エスペラントカバーはプロの歌手に歌ってもらったということです。もう一つは、それとは対極的なロックで、レディ・ガガの“perfect illusion (perfekta iluzio)”、こちらはエスペランチスト（Christina Casella）がカバーしていますが、原曲に比肩しうる歌唱力です。なお、前者は前田可一さんが、後者は山口が紹介しました。

ゲームでは堀田裕彦さんが、料理の名前をエスペラントでどうか、という趣向で、イラストを交えて出題しました。たとえば、「親子丼」はエスペラントでどうか？正解があるわけではないのですが、センスが問われますね。

紙芝居「MEIKO」は、広島の栗原明子（めいこ）さんの被爆体験をもとに、その長女の方がエスペラントで書き起こしたもので、絵も自身で描かれました。本

作の語りは佐藤順さんと後藤好美さんにしていただきました。佐藤さんは初心者ですが、このためにのべ数十時間にわたる音読練習を重ねてもらいました。

記念写真のあと、そこにちょうどかけつけていただいた米川五郎（90歳）さんには「新しい句集とhajkoの試み」と題してお話ししていただき、「当分は死んで居れぬ年忘」ほか、10句を披露なさいました。



第二部の懇親会は、当初は仕出し（和食会席）をとる予定だったのですが、想定以上に多くの参加予約があり、着席しての会食は難しいため、オードブルセットをテーブルにならべ、立食形式としました。ちょっと手狭ではありましたが、参加者が自由にいろいろな人と交流しあうのには、このほうがよかったように思われます。

今回、中日新聞（東京新聞）からの取材が入りました。中日こどもウィークリーを担当する石川由佳里記者は、東京外大時代にエスペラントを学んだことがあるとのことで、参加者自己紹介時にエスペラントを交えて挨拶されました。1月19日の紙面にエスペラントのことを紹介したい、とのことで、日本エスペラント協会および名古屋エスペラントセンターを訪ねてられました。（参加者の数には記者さんは入っていません）



La 1an de decembro sabate okazis Zamenhofa Festo en la oficejo de Nagoja Esperanto-Centro, kiu situas en la urbocentro de Nagojo. Ĉeestis 24, inter kiuj estis 5 unuafojaj partoprenantoj, kaj la plej aĝa havis 90 jarojn.

Notinde estas, ke en ĝi ĉeestis raportistino el la tagĵurnalo *Chunichi-Shimbun*; ŝi ekhavis intereson pri Esperanto kaj venis al ni por informi ĝin, precipe ĝian aktualan uzadon, al infanoj.

La tuta programo konsistis el kelkaj eroj; inter ili ĉefaj estas jenaj:

*Prezentado de libroj. 4 partoprenantoj prezentis verkojn mem verkitajn aŭ tradukitajn aŭ ŝatatajn.

*Prezentado de kantoj. 2 kantoj estis prezentitaj en la originalo kaj en la Esperanta versio. Nome, la kanzono “la vie en rose (la vivo rozas)” de Édith Piaf, kaj la rokmuziko “perfect illusion (perfekta iluzio)” de Lady Gaga.

*Vorto-ludo. Oni amuzis sin per diveno, kiel esprimi diversajn kuirajojn kaj kuirartojn.

*Bildrakonto. Kun bildoj sur ekranoj 2 partoprenantoj voĉlegis tekston, kiu temas pri atombombado. Cetere la atombombito kaj la verkinto, nome patrino kaj filino, ambaŭ estis/-as espistoj.

*Paroladeto. La 90-jaraĝa emerita profesoro de la Universitato de Edukado Aichi parolis pri sia lasta okupado en hajko kaj ĝia traduko en Esperanto.

*Bankedo. Ĉar ĉeestantoj estis pli multaj ol antaŭspozo, ni vespermanĝis je bufeda servo. Ni sufiĉe amuzis nin per bonaj manĝaĵoj kaj babilado.

ザメンホフ祭取材した「中日こどもウィークリー」に掲載されたエスペラントの紹介記事 (2019.1.19) ⇒



ワールド・コラボ・フェスタ2018への出展

前田 可一

名古屋エスペラントセンターは、愛知県国際交流協会等の組織で構成されるワールド・コラボ・フェスタ実行委員会の主催により11月10日(土)~11日(日)にオアシス21において開催された15回目となる同フェスタにブース出展した。幸い2日間とも好天に恵まれ多くの家族づれ、老若男女で賑わった。センターからはエスペラント紹介のためのパネル、辞書、学習書、絵本等を展示し宣伝用パンフレットの配布を行なった。また、東京からアレキサンドラ綿貫さんを招聘し5分間講座等を実施した。

ブースの運営に当たってはセンター委員5名センター会員4名の協力を得た。

エスペラントの認知度は高齢者ほど聞いたことがあるなど、知っている人の割合が高く。若い人ほど認知度が低くエスペラントってどこの国という人もかなりの比率で見受けられた。

パネル展示したゲームソフト「ことのはアムリラート」からの学習も可能と説明すると感心する人もいたが、CEFR検定試験の時に現れたいわゆるオタク層と見受けられる来訪者はいなかった。

英語学習圏の巨大マーケットが拡大するなかでエスペラントの宣伝普及が特に若者への焦点を絞った展開の必要性を改めて感じた2日間であった。

エスペラントブースへの来訪者(主としてスタンプラリー参加者)

11月10日(土) 217名

11月11日(日) 220名

エスペラントへの反応が

あった来訪者

11月10日(土) 70名

11月11日(日) 64名

氏名及びメール先

記入者数

男:1名 女:1名

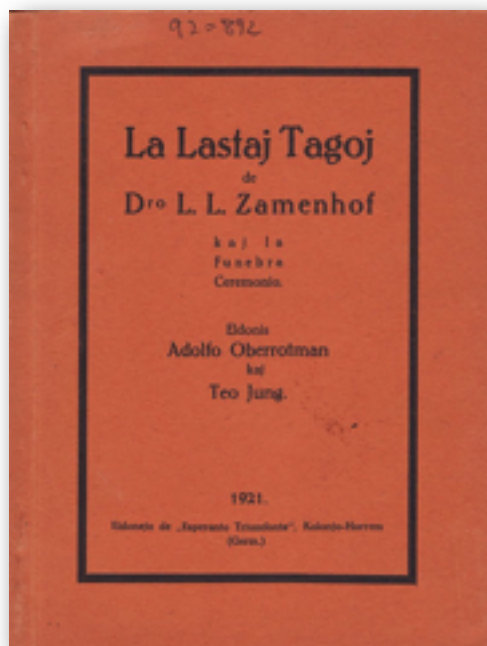


センターの蔵書から (1)

La Lastaj Tagoj de D-ro L.L.Zamenhof

猪飼 吉計

センターに、竹中蔵書が運び込まれる段になった時、さっそく膨大な本たちを一つ一つ手にとって調べていたわたしは、ひとつだけ箱に入れて大切そうに保存されている本を見つけた。表紙には、*La Lastaj Tagoj de D-ro L. L. Zamenhof* とある。ザメンホフの葬儀のおりに読まれた、弔辞を編集したものであったが、じつは、わたしはこの本の存在自体それまで知らなかった。ひとたび目にして基本的資料であるのは明らかであった。あり合わせのものとはいえ、函にもおさまられ、さらに本自体にはビニールが被せられているという念の入れようである。そこまでしてある本は、蔵書の中でも他に見当たらず、いかに竹中さんが、この本を特別扱いしようとしていたか、うかがい知れた。



ザメンホフは晩年心臓をわずらっていて発作が頻発していたが、死の直前の数日は発作は減ってはいたものの、ベッドにほとんど寝たきりだった。4月14日死の当日は、体調がことのほかよく、昨夜見た夢を話して、この分なら今夜はぐっすり眠れそうだ、とかかりつけの医者に話した。30分ほど話してのち長椅子に腰掛けようとして立ち上がろうとしたので、クララが寄って抱えた時は、すでに息を引き取っていた。静かな死に際であった。

翌々日の葬儀には、ワルシャワ中から参列者が集まったが、戦時下のおり、国外からの参列者はわずかふたりであった。

中身は、Belmont の詩 “Enterigo de la Majstro” や Baghy による “La Majstro mortis.” という詩も紹介されている。さらに、ザメンホフの最期の日々の模様が描かれ、そのあと、葬儀に際してなされた弔辞が紹介されている。ワルシャワのシナゴグの説教師 d-ro S.Poznanski と Pola Esperantista Asocio 会長の Antoni Grabowski、外国人を代表して、港湾司令官 Neubarth の挨拶である。そして、葬儀の様子が描かれている。さらには、モニュメントを設立する構想についても紹介されている。

戦前の絵葉書に「君が代」の訳詞

山田 義

名古屋エスペラントセンターの蔵書の整理中に見つけた絵葉書（14cm×9cm）である。これは、Amo-Akademio が1956 年発行した Kenji Ossaka “El Orienta Florbedo” という本に挟んであった。そのはがきは、今見る官製のはがきより小さい。「東京市本郷区元町★財団法人日本エスペラント學會發行」と旧漢字で記してある。東京市という言い方は第二次世界大戦中の1943年（昭和18年）までだからこの POŝTKARTO は戦前の発行である。

この本には、オルガンの前に座る著者小坂狷二の写真もある。著者は日本のいろいろな詩歌や漢詩なども訳して見せている。楽曲の歌詞も訳している。箱根の山、恋せよ乙女、荒城の月、宵待草、からたちの花などである。小坂狷二は西洋音楽にも造詣が深いとみえて山田耕筰などの声楽曲もそのエスペラント訳では韻を踏み、リズムとエスペラントのアクセントをごまかしなしに訳している。この本の巻末には簡単な五線の譜面があり、音符付きで訳詞を載せている。その中この絵葉書にもある「君が代」も載っている。

この本の著者小坂狷二（1888-1969）は1938年から46年まで名古屋の日本車両製造で車両の技師長をしていた。名古屋のエスペラント運動にも深く関わっていた人だ。

絵はがきの表には、「國語を愛するものは國際語エスペラントを學べ」とあり、裏の文面には富士山と楽譜が印刷してある。「君が代」のエスペラント訳詞。

“Regado Lia” (Japana Nacia Himno) tradukita de Kenji Ossaka

Daŭru longe lia tron’!
Ĝi eterne glora restos,
Ĝis el ŝton’ kreskos jen
Forta roko por la ben’—
Verda ĝin musko vestos.

「エスペラントでうたう日本の歌」は日本のエスペラント運動100年間に訳詞や作詞した歌を収めた歌集であり、小坂狷二のこの歌も載せている。5行目、Verda ĝin musko vestos が面白い。<岩を緑の苔が覆う>と訳し、エスペラント運動が根付くようにとも読めなくもない。戦時下の訳詞者の洒落なのか抵抗なのか。

実は小西岳も「君が代」を Mikado という語を使ってエス訳している、Reĝo Mikado ではく、Rego Mikada である。2006年に私が受け取ったものであり、未発表だと思う。

“Kimigajo” tradukita de Konisi Gaku

Rego Mikada
daŭru plu dum jarmiloj,
ĝis la plej eta ŝton'
kreskos fine granda rok'
kaj sur ĝi kreskos musko.

参考までに、伸ばして歌う箇所を__で示しておく。

Rego Mi_ka_da
daŭru plu_dum jarmiloj,
ĝis la plej eta ŝton'
kreskos fine granda rok'
kaj sur ĝi kre_sko_s mu_sko.

REGADO LIA
(Japan Nacin Himno)

Daŭru longe lia tron'!
Ĝi eterne glora restos,
Ĝis el ŝton'
kreskos jen
Forta-roko por la ben'—
Verda ĝin
musko vestos.

The image shows a musical score for the song 'REGADO LIA' (Japan Nacin Himno). It features two staves of music with lyrics in Esperanto. The lyrics are: 'Daŭru longe lia tron'! Ĝi eterne glora restos, Ĝis el ŝton' kreskos jen Forta-roko por la ben'— Verda ĝin musko vestos.' The music is written in a simple, accessible style, likely for a children's songbook or a beginner's music book. The background of the score has a faint illustration of a mountain, possibly Mount Fuji, with a sun or moon rising behind it.

スペインとポルトガルにて

山本 由紀子

今年のエスペラント世界大会は、ポルトガルで開かれた。その前一週間マドリードでエスペラント教育連盟の会があると言うので、両方参加することにした。二つの国とも行ったことがなかった。何かと毎日が忙しく結局ガイドブックもあらかじめ読むこともなく、それすら家に置いて出かけた。正直もう重い旅行カバンは持ちたくないし、旅行に行くのがおっくうですらあった。携帯電話とかスマホとかもなしに出かけるのは、我ながら無謀だなあと思った。マドリードでは参加者のほとんどが、大学の学生寮に泊まった。夜野外で自国食べ物紹介の夕べの行事があり参加者がそれぞれ自分の国の食べ物を並べそれぞれふるまったり、試食をして回ったりした。町田から参加されたUさんが羊羹と日本酒を持ってきてくれた。アルメニアの小さな小旗をたてて食べ物を紹介しているアルメニアの女性と少し話しをした。ソビエトに支配されていた時より今はより幸せだと言っていた。後日アルメニアの文化についての小講演会があった。独自の文字がありロシア語とは全くちがっていた。今でも使い続けているし、アルメニア語が国の言葉になっている。

開会式の時隣りに座っていたアメリカのセントルイスから参加の女性とプラド美術館へ行った。彼女はスペイン語の教師をしていたので路を尋ねるのに都合がよかった。プラド美術館には、ベラスケスやゴヤなど多くの絵画がたくさん見られた。別の日ルイナソフィア美術館を訪れた。そこでばったり先日プラド美術館で一緒したアメリカの女性に会った。ピカソの『ゲルニカ』のある部屋を教えてもらった。ゲルニカの前には大勢の人がたたずんでいた。私もすぐには立ち去れずあきずにずっと見ていた。最近読んだ『西部戦線異状なし』の描写よりもっと強烈な印象を受けた。この美術館は65歳以上は無料だった。

25日は全員一日遠足だった。私はトレドへ行くコースを選んだ。出発のバスを待っている間、メキシコから参加した若い男の人と立ち話をしていた。まだ学生だった。私の名前の漢字を写真に撮りたいと言った。日本のことを色々興味をもっているようだった。その彼が私にどうしてエスペラント語をまなぶのかと尋ねてきた。私は次のように答えた。ザメンホフの考えに共鳴すること、誰からも中立平等で、学ぶのにとっても易しいからと。その学生は自分もそう思うと言ってくれた。一緒にいた女の子を連れた若いお母さんがそばにいた。その女の子の父親はドイツ人で母親はそばのメキシコ人だった。女の子はドイツ語、スペイン語、それにエスペラント語が話せるとのこと。

その女の子に、あなたは何歳?と尋ねると四歳です。と見事にエスペラント語で答えてくれた。

三日目に全員バスで昼食のためレストランに出かけた。バスで隣に座ったのは、サンフランシスコから参加の95歳の老人だった。話し方はしっかりしていた。レストランのごちそうはスペイン風の料理の一つなのか、茶色の壺のような入れ物にソーセージとか肉とかいろいろな野菜がいっぱい入って蒸し煮にしたようなものだった。こちらの食事時間は大体すごく遅い。朝食は7時から9時半までで普通だが、昼食は2時から3時半まで、夕食はこれも遅い夜8時半から10時までというのが普通だった。食堂もその時間にに合わせてあった。今回この大会にはアフリカから二人の男性が参加していた。食堂ではコンゴの人と話をした。コンゴは良い所ですかと尋ねると良い所です、との答えだった。まだコインブラその人はエスペラントは初心者だった。トンゴから来た男性はベテランだった。エスペラント運動でのアフリカ文化についての分科会で彼は話をされた。

7月28日にマドリードからリスボンへ2台の大型バスに分乗して国境を超えた。手続きも何もなかった。時差が1時間なので時計を合わせるくらい。又しばらくして左右に川があり長い橋を渡ると我々のバスはリスボン市に入ってきた。全員が世界大会会場へ行き受付をすませた。その後それぞれが事前に申し込んだ宿舎に向かった。最寄りの駅へは私は鉄道だった。高齢者は割引料金だった。岐阜から参加のSさん、Fさんと別れ、リスボンのすぐ隣のアルマダ市にあるユースホテルをめざした。駅には1台タクシーがとまっていたが先客の親子が乗ってしまった。まもなくもう一台きたが別の人が予約していた車だった。私が乗ろうとしかけてがっかりしたのを見たのか、その後次に来る45番のタクシーに乗りなさいとその人が言ってくれた。何と私のために予約してくれたのだ。オブリガードと何度も頭を下げた。歩いて行けないことはなかったが本当に助かった。アルマダのユースホテルは少し古い建物だったが広々していて部屋数も多かった。そこからの川向こうに見えるリスボンの街全体の景色は素晴らしかった。最後まで私は広い部屋を一人で独占した。

最寄りの駅からシントラへ簡単に行けそうだった。40分くらいで目的地に着いた。乗り降り自由の循環バスで一順してから、ムーアの城趾の麓で降りた。約3キロあると言われるアラビア風の城趾がいくつもいくつもあり、それぞれ頂上には旗がひらめいていた。全部の城趾を歩いて登った。どこからも緑豊かなシントラの街を心ゆくまで、満喫することができた。とても満足した。

別の日にリスボン旧市街をチェコの女性2人とまわった。一人がチェコ語で書かれた大きな地図を持っていた。旧市街は道も狭く坂はやたらにあり石畳だった。狭い道に黄色の小さなチンチン電車が通っていた。窓からは、洗濯物がひらひらしていた。全体に絵描きなら描きたくするような風景だと思った。主な所を地図をたよりにほとんど歩きまわった。チェコの一人は、幼稚園で働いていたが親とのトラブルで退職した、と話してくれた。また私に年齢を聞かれたので80歳

を超えていると答えると驚かれた。途中何か食べる店が色々あったが一度も寄らなかった。チェコとかポーランドとか東欧から参加している人は、お金を節約している感じだった。

水曜日はいつも会場を閉鎖して1日遠足の日で私はコインブラのコースを選んでいった。リスボンから北20キロのコインブラでは特に1724年に設立された図書館が印象に残った。30万冊もあるとか、とても古い本でもきちんと保存されていて圧巻だった。それぞれの部屋にあるテーブルも特色があった。コインブラでの昼食はフランスからきたAさん、ブラジルからのご夫妻と私の4人でした。Aさんは日本人でフランスの人と結婚したが夫を亡くされていた。彼女は岩手におられる母親を尋ねるためエスペラントの日本大会には毎年参加されているのもう親しくなっていた。彼女の知り合いのブラジルからのご夫妻は二人とも弁護士だった。ここに来る前にモロッコに2週間、ポルトに3日間行ってきたとか。ずいぶん金持ちらしく、Aさんと私の分まで食事代を払ってくれた。でもいろいろ苦勞して勉強して資格をとったとか。彼女は日系のブラジル人だった。コインブラからリスボンにもどるバスでは私の右にフランス人の男の人が座った。彼は3ヶ月後に孫が生まれると喜んで話してくれた。パリの郊外に住んでいる彼にマクロン大統領のことを尋ねてみると、顔をしかめて大嫌いと言う返事だった。もっと働かせようとするが市民は反対しているとのこと。日本の過勞死については知られているようだった。

次の日会場で東チモールの青年にばったり会った。昨年ソウルの大会でホテルが同じこともあって色々話したり夕食をともにしたりしてたので、再会を喜んだが今回は話をする時間がなかった。

大会も終わりに近づいたある夕べ、私はUさんとそれから彼女とずっと一緒だったフランスの人たちとファドが聞けるレストランに行った。テーブルのすぐ側で2人がギターを弾き黒人の歌い手がしみじみと歌うのを聞いた。歌は素敵だった。

8月6日早朝リスボンを離れるその前1日半何も予定をたてていなかった。思い切って大会最後の2日を出席しないで急遽ポルトまで行くことにした。私の泊まった宿舎から大会中一度々私を含めて4人で大会会場までタクシーで通ったりしていた。韓国の男性とブラジルの青年と別のブラジル女性だった。3日の朝7時に出発することを告げていたのを覚えていたのか、ブラジルの青年がわざわざ7時に玄関に降りてきてくれてタクシーを予約してくれた。まもなくタクシーが来た。お金は払ってあるからもう払う必要がないことも私に告げた。私は前日お願いしたのではなかったが、スマホもなくポルトガル語もできない私のことを察してくれたのだと思った。私は感激してしまった。オブリガーダ(女性はオブリガードでなくオブリガーダと言うことをこの間学んでいた。)を繰り返しカバンとともに駅へ向

かった。3時間位かかってポルトに近づいた。まもなくほとんどの乗客がおり始めた。プラットホームにはポルトの表示はなかった。インフォメーションがすぐ見つかり、あらかじめ心づもりのあったホテルを確認してタクシーに乗った。チェックインの後地図を見ながらRIODouroの川にかかっている橋をめざして歩いた。途中日陰で休んでいると2人づれの男の人が道に迷っているのかと尋ねられた。彼らは中国からの旅行者だった。ただ休憩してるだけとかリスボンから来たこと、エスぺラント大会のこと北京でも世界大会があったことなど色々話すとエスぺラントに興味を示してくれた。持っていた大会ロゴの描写された布袋を見せるとその袋と一緒に写真をとっても良いかと言われた。最後に何を勘違いしたのか私はカムサハムニーと言ってしまった。慌ててシエーシエだと訂正した。橋の上から眺める景色はとても良かった。黄色いメトロの電車が橋の上を度々通った。確認しながら歩いて来たつもりだったがホテルにもどるのにさんざん迷った。途中でポーランドから来た3人の若者に会った。ビヤリストックから来たと言う。その街ならザメンホフが生まれた所だし行ったことあるよと話した。リスボンでの世界大会のことも話した。彼らはザメンホフのことは知っていたが残念ながらエスぺラントは学んでいなかった。親切な若者3人は私のホテルまでついて来てくれた。最後にオブリガーダとかサンキユウを繰り返し1人づつ握手をして別れた。たしかポーランド語ではジンクイエ、そう言えばよかったと後で残念に思った。

5日予定より1本早い列車の切符に変更したが1等車しかなかった。降りた駅の1つ手前のポルトの駅は構内の陶で作られた壁画がすばらしかった。アズレージョと言うらしい。1駅乗ってから目的の列車に乗り換えるのだが降りてみるとなんとプラットホームは乗客で超満員だった。どうも前の列車の運行がなかったみたいだったが何の説明もアナウンスもなかった。ようやく1時間遅れで列車が入ってきた。皆はわーい、やっと来たと言うような歓声をあげていた。不満そうな顔はあまりなかったみたい。こんなことが度々あるのかなあ?私は1等の切符だったので席はちがうが何とか乗り込んだ。予定通り夕方近くリスボン空港に近いユースホステルについた。受付のおじさんは、日本人はとても働くそうですね、と私に言った。今日は40度以上の気温だったと言ってくれた時そんなことを付け加えた。モーニングコールもなく目覚まし時計も持っていなかったのもとても緊張したが何とか朝4時頃出発できた。タクシーは受付の人に頼んだ。リスボン空港は前もって下見をしておいたので不安はなかった。

新会員自己紹介

伊藤 順子

エスペラントはいつまでたっても全くの初心者である。エスペランチストである夫、伊藤俊彦がいるにもかかわらず、教えてもらうでもなく、話すでもなく、いつも初級のテキストから離れられないでいる。夫から言われることといえ、ば、“そんなに繰り返して初級をやらなくてもいいんじゃないの!”ぐらい。

そんな私でも、エスペランチストたちとのかかわりはある。海外からのエスペランチストたちが来れば、宿泊と食事を用意するのは私の仕事である。国内では、藤本達生さん、堀泰雄さん、米川五郎さんとは、夫以上に仲良くしていただいている。エスペラントを通したお三方の生き方に感動していて、いろいろお話をうかがうことが楽しみである。

いつまでも初心者である私が初めてエスペラント講座を受けたのは今から25年も前のこと。フランスのグレジオン城の夏のセミナーオである。幼稚園の年長になる息子を連れて参加した。親子ふたり旅の案内をしてくださったのが、その時たまたまヨーロッパにいらした藤本さん。パリのドゴール空港で待ち合わせをして、グレジオン城のあるボジェまで同行してくださった。藤本さんは、3-4日だけエスペランチストたちと交流され、そのあとすぐにスペインへ出かけられた。30人ほどの滞在者の中で、日本人は息子と私のふたりだけで心細かっただろうが、エスペラント語もフランス語もしゃべれないのに、3週間も滞在して、楽しかったことしか記憶がない。

のちの話になるが、2012年からイタリアに住むことになった時には、藤本さんのイタリア人の知り合いのエスペランチストの紹介でアパートを借りることができたということもあった。また、イタリアでは元世界エスペラント協会会長のレナート・コルセッティ氏やルッカに住むディーコン・マスターマン氏らにもお目にかかった。

堀さんからは、世界中で収集してきた楽器を寄贈していただいた。その楽器を使って、私が主宰している「えほんのもり」で何度か「世界の楽器コンサート」を開いてもらった。また、東日本大震災後、「えほんのもり」を通して、岩手県釜石市唐丹小・中学校支援活動もごいっしょさせていただいている。

八ヶ岳エスペラント館では、運営委員長の堀さんのもと、夫とともに委員として運営に携わっている。他にも、ネパールの「ヒマラヤ・レンコンティージュ」にも同行させていただいた。

以上のように、自身のエスペラントの勉強のことになると、ほとんど書くこともないが、去年は、絵本『しっぽがわらう Vostoj ridas!!』(杉藤由佳絵)を三五館

シンシャから出版させていただいた。動物の正面としっぽを表裏で絵本にしたものだが、

それぞれの動物のしぐさから「笑い」をメッセージにオノマトペをエスペラント語との対訳にした。タイトルに関しては米川さんに相談し、想像力をかき立て、ひとことで絵本の中身が想像できるタイトル『しっぽがわらう』が生まれた。この絵本を、刊行直後にリスボンで開催された世界エスペラント大会で紹介させていただいた。ここでも、堀さんには大変お世話になった。

初級のテキストから抜け出すことを決心して、年始からエスペラント作家の堀さんの作品を読み始めた。これが面白くてやめられないのである。堀さんの人生観とユーモアたっぷりの『Kanji kai Amane, Familiaj Rakontoj』や『Miaj Vojaĝoj tra la Mondo』に魅せられて、今年は、エスペラントをちゃんと勉強してみようと思っているのである。



2018年の日韓共同開催エスペラント大会の八ヶ岳分科会で
『しっぽがわらう』を紹介する伊藤順子さん

活動日誌（11月後半から2月）

11/16（金）	11時から15時	蔵書整理
11/21（水）	16時から18時	読書会
11/30（金）	17時半から19時半	初級講習会
12/1（土）	12時から20時	ザメンホフ祭
12/7（金）	11時から15時	蔵書整理
12/7（金）	17時半から19時半	初級講習会
12/19（水）	16時から18時	読書会
12/20（木）	18時から20時	センター委員会
12/21（金）	11時から15時	蔵書整理
12/21（金）	17時半から19時半	初級講習会
1/12（土）	11時から15時	蔵書整理
1/18（金）	17時半から19時半	初級講習会
1/23（水）	16時から18時	読書会
1/29（火）	18時から20時	センター委員会
2/3（日）	14時から18時	入門講座1
2/8（金）	17時半から19時半	初級講習会
2/9（土）	11時から15時	蔵書整理
2/20（水）	16時から18時	読書会

今後の地区の予定

入門講座

第2回：2019年3月3日（日）14時から18時

第3回：2019年3月24日（日）14時から18時

第4回：2019年4月28日（日）14時から18時

講師：山口眞一

受講料：教材費1000円+各回500円

テキスト：『ドリル式エスペラント入門』（日本エスペラント協会）

第1回は2月3日（日）に開催され、4人の受講がありました。第2回からはその続きになります。

ミニ講演「いまさら聞けない“アムリラート”」

3月30日(土)

14時から15時。

センター事務所にて

すっかりブームになりエスペラント界に旋風を巻き起こした美少女アドベンチャーゲーム“アムリラート”って何？について、委員の堀田裕彦さんが語ります。



維持員総会

3月30日(土) 15時から18時。センター事務所にて

年に1回の名古屋エスペラントセンターの議決機関。みなさんの意見をお聞かせ下さい。

▶編集後記

○インターネットの発達で、エスペラントを独習する人が増えています。それと反比例するかのように、様々なエスペラント会では会員減少と活動者不足に悩まされています。従来は、地方会の講習会で学び、あるいは大学のサークルで学んで、会のメンバーとして次世代の運動を担う、というのが主流だったように思いますが、その潮流が変わろうとしています。また学習動機も多様化しています。時代の変化に対応するため、エスペラント運動の戦略の見直しが必要です。名古屋エスペラントセンターとしてはどう対応していくのを、長期的展望のもとに考えていかなくってはなりません。そのためにも、次回の総会には多くの方のご参加をお願いします。(山口)

センターの会員（維持員）募集中

A:月500円 / B:月1,000円 / C:月2,000円 / D:月3,000円

ランクによる会員資格に差はありません。ランク別及び振込月数を明記して郵便振込（口座番号は表紙タイトル下）へお願いします。メールアドレスがあれば、それもあわせてご記入ください。